

平成26年2月定例会 一般質問（概要）

平成26年3月6日

[坂上 敏也 議員](#)



1 都市魅力創造の取組みについて

〈坂上議員〉

大阪への外国人旅行者いわゆるインバウンドの受入状況は、府の推計で2013年は約260万人で前年比約28%の増加、外国人延べ宿泊者数が約435万人で前年比約42%の増加となる見込みで、いずれも全国の伸び率を上回る良い状況です。しかし、2020年にインバウンド650万人をめざす大阪府にとっては、まだまだ道半ばであり、さらに取り組みを進める必要があります。

今年度、大阪城において画期的な二つのイベントが実施されました。一つは、昨年6月に開催されたアジア初のモトクロス世界大会。このイベントは、特別史跡である大阪城西の丸庭園を会場とすることで、大きな話題となりました。

府市が力をあわせて、十分な調査や史跡保存のための配慮を施して実現したことが重要で、さらに、世界で2億人が新聞やテレビ等の報道に触れたと言われるほど広報効果のあるイベントであったことは、これまでにないことです。

もう一つは、昨年の12月から今年の2月にかけて、同じく西の丸庭園で開催された、「大阪城3Dマッピング」です。

このイベントの入場者は、2か月の期間中に50万人以上が会場に訪れて、冬季の

大阪城にこれだけ多くの人を集めることができたことは、これまでの観光施策では考えられません。

このイベントを主催した民間企業のノウハウもさることながら、同じく主催者として、実現に向けて奔走した大阪観光局の努力が大きな成果となったものです。

これまで議会において、2015年が、大坂夏の陣から400年、道頓堀開削から400周年を迎えることから、シンボルイヤーとして取り上げられてきました。

現在、地元商店主等を中心とした「道頓堀プール」の計画や「とんぼりリバーウォーク」を活用したイベントの実施により、ミナミを盛り上げていこうと努力をされています。

現状においても、大阪には、歴史や食の魅力、水都大阪をはじめとする名所など数多くあり外国人観光客を魅了しています。しかし、さらに観光集客を図るには、シンボルイヤーとなる2015年を機に、これまで以上に世界に大阪の魅力を印象付ける取り組みが必要です。

「大阪都市魅力創造戦略」では、「民が主役、行政はサポート役」との基本的考え方のもと、世界が憧れる都市魅力を創造し、世界中から人、モノ、投資等を呼び込むとしています。

ミナミの地元団体は、シンボルイヤーと位置付ける2015年に向けてすでに行動し、取り組みを進められています。

広域行政を担う府として、大阪市をはじめとする市町村や地元団体、民間と連携し、府域全域が盛り上がり、シンボルイヤーにふさわしい年となるような取り組みを進めていただきたいと思います。

アジアの観光客に絶大な人気のある道頓堀を含む「水の回廊」は、水上から歴史ある街並みやライトアップされた橋を眺めることができ、常設川床の「北浜テラス」など水辺の魅力スポットも多く整備されるなど、大阪が世界に誇る魅力ある地域です。

水都大阪の取組みについては、民間が活動しやすい環境を作るため、今年度、府市と経済界で、民主導の都市魅力創造・まちづくりの推進組織である「水都大阪パートナーズ」を立ち上げるとともに、都市経営の視点で民間活動を支援する行政組織の「水と光のまちづくり支援本部」が設置されました。

行政が行う遊歩道などのハード整備を着実に推進することはもちろん必要ですが、地域や民間が中心となって進めるイベントや事業活動は、賑わいを創造するためのキーポイントです。

さらなる賑いを創出し、持続的にぎわい創出をするためには、こうした地域や民間活動に対して支援が必要と考えますが、府民文化部長のご所見をお伺いします。

〈 府民文化部長 答弁 〉

水都大阪の取り組みですが、これまで、府市で、橋梁・護岸のライトアップや遊歩道の整備等により、水辺の民間活動を促進する取り組みを進めていますが、さらなる水辺の賑わいづくりを進めるためには、民間の自由な発想による積極的な取り組みを引き出していくことが重要と認識しています。

現在、水の回廊を中心とした大阪の水辺では、民間の取り組みとして、大阪の食を舟で回る水辺バルや水辺のにぎわい施設によるイベント開催などが行われ、また、大阪中央卸売市場周辺の中之島GATEや中之島公園において、民間事業者による賑わいづくりの計画が進められています。

今後も水辺スポットをより一層魅力的なものとするため、水都大阪パートナーズをはじめ民間の取り組みをサポートし、府として情報発信、また規制緩和などに力を入れ、水と光の首都大阪の実現に向けて取り組んでまいります。



〈 坂上議員 〉

道頓堀と並ぶ大阪の名所として、中之島や御堂筋があります。

中之島は、遊歩道や美しい公園が整備されています。また、中之島図書館などの歴史的な建物もあれば、新しいビルも建ち並び魅力的な都市景観が創造されています。更に科学館や美術館も混在するなど大人から子どもまで楽しめる空間も形成されています。今後、中之島に人を呼び込むにはこの魅力を磨き上げ、国内外に伝えていくことが必要です。

もう一方の、御堂筋は、大阪市の中心軸で、メインストリートです。春の新緑から

秋の紅葉するイチョウ並木が作り出す景観は、都心部において四季を感じさせる、わが国を代表する大通りと呼ぶにふさわしい美しさを備えています。

中之島では、2003年から10年以上にわたって「OSAKA光のルネサンス」が開催され、「御堂筋イルミネーション」も2009年に始まって以来5年が経過するなど、いずれも冬の大阪を彩る風物詩として定着しています。

今年度からは、これらのイベントを核にして、民間主体のプログラムと連携し「大阪・光の饗宴」として実施されています。今後も民間と力をあわせて、更に魅力ある事業として、光の輪を広げていく必要があります。

御堂筋イルミネーションは、事業開始当初から点灯区間を伸ばし、現在は、淀屋橋交差点から新橋交差点までの1.9kmで実施されています。しかし、電源の問題などがあり、新橋交差点から難波西口交差点までの間は、これまで点灯区間には入っていませんでした。

また、御堂筋イルミネーション事業は、今年度の当初予算に計上されていませんが、大阪市とともに費用を負担して難波まで延伸する計画で予算要求を行っていたと伺いました。来年度に大阪市の補正予算が措置されることになれば、延伸は実施されるのでしょうか。

御堂筋イルミネーションについては、地元から「できるだけ協力するので、ぜひとも延伸してほしい」との希望も伺っています。この事業を継続していくには行政の負担だけでなく、地元の協力も得ながら実施していくべきだと思いますが、今後どのように取組んでいけるのか、府民文化部長にお伺いします。

〈 府民文化部長 答弁 〉

去年から始めました御堂筋イルミネーションにつきましては、今年度は、中之島公園の「OSAKA光のルネサンス」これは大阪市が中心に実施されてきた事業でございますが、これとともにこれまでの取組みをスケールアップして、「大阪・光の饗宴」として実施いたしました。これは梅田や阿倍野など大阪市中心部の各エリアでの民間主体の光のプログラムと連携して、一体的にプロモーションするという広がりのあるプロジェクトにすることができました。

「大阪・光の饗宴」がめざすフランス・リヨンの「リュミエール祭」では、光のクオリティの高さはもちろんのこと、官民の役割がしっかりと構築され、様々な形で民間が参画することで、世界的な光の祭典となっております。「大阪・光の饗宴」でも、行政だけでなく、民間の皆さん自ら光のイベントに取り組んでいただき、あるいは協賛などをしていただきまして、一緒になって、光のイベントを盛り上げ、拡充していただくことを目指しております。

「大阪・光の饗宴」のコアイベントである「御堂筋イルミネーション」につきましては、その規模を拡大し、難波西口交差点まで延伸することを計画しており、今後、

府市で予算化が可能になれば、地元のミナミエリアの企業・団体等の協賛や参画を得まして、2014年度の冬には実現したいと考えております。

〈坂上議員〉

御堂筋と中之島ではじまった光の取り組みが、なんば、梅田、あべの・天王寺といった大阪を代表する主要ターミナルの周辺をはじめ、天満・桜ノ宮、そして大阪城と徐々に増え、大阪市内各地に広がってきました。この広がりは府市の主導ではなく、民間主体の取り組みであることが重要です。つまり行政の灯した明かりが各地の民間の取り組みへと導き広がりを生み出しているのです。

寒い冬の夜の大阪を、これまで以上の暖かい光で、さらに街全体の輝きが増していくように、これからも取り組みを進めていただくように要望しておきます。

御堂筋は、昼はビジネスの大動脈としての顔があります。

この大動脈を歩行者に開放し、御堂筋の魅力を国内外に発信していくため、御堂筋での大規模イベントとして「御堂筋kappo」と「御堂筋フェスタ」がこれまで実施され、多くの来場者で賑ってきました。

しかし、海外からの観光客に参加を促すのであれば、2015年のシンポルイヤーをステップアップの機会として捉え、集客が期待できるように改変していくことが望まれます。

改変にあたってイベントの企画内容を、十分な期間をかけて検討していただくとともに、民間のアイデアを、国内外を問わず広く募集するなど、企画、内容の決定方策についても検討のうえ、更に魅力あるイベントの実施に向けて取り組んでいくべきと考えますが、府民文化部長のご所見をお伺いします。

〈府民文化部長 答弁〉

御堂筋イベントとして、これまで大阪府市で実施してまいりました御堂筋kappoと御堂筋フェスタを来年度は一体化して、新たに「御堂筋ジョイふる」として実施する計画でございます。企画については、大阪観光局などが実施を予定している「大阪国際音楽フェスティバル」とも連携し、ジャズをテーマにしたイベントにする予定であり、御堂筋の魅力発信のため、企画内容の充実に努めているところでございます。

2015年度の事業につきましては、来年度事業の検証結果や、関係者のご意見も踏まえるとともに、企画内容について、広くアイデアを募集するなど検討いたします。そして、発信力の高いイベントとなりますよう、府市一体となって取り組んでまいりたいと存じます。



2 2015年ミラノ万博への参加について

ミラノ万博には、世界140ヶ国が参加すると想定されており、入場者数は、約2000万人が見込まれています。今回の博覧会は「地球に食料を、生命にエネルギーを」をテーマとしており、日本としても、日本食や食文化の魅力を広く国際社会に発信するような日本館の出展準備を進めていると聞いています。

大阪への観光客数は増加傾向にあります。この伸びは、成長しているアジアを中心に観光客を呼び込んだものと伺っており、関西国際空港の入国者数を見ましても、韓国、台湾、中国が上位を占めています。アジアゲート大阪を唱える観光局の一定の成果が上がっています。

しかし、今後、更にインバウンドを伸ばしていくには、欧州において日本の魅力を発信していくことも必要です。

ミラノ万博は、世界各国から人々が集まる国際舞台です。この博覧会は、食がテーマなので、魅力ある大阪の食をアピールし、その認知度の向上に努め、海外からの観光客の増加につなげるべきだと考えますが、府民文化部長のご所見をお伺いします。

〈 府民文化部長 答弁 〉

ご指摘にありましたように、「食」は大阪の大きな魅力の一つであり、様々な機会を捉えて、大阪の魅力を世界に向けて発信していきたいと思っております。

このため、現在、大阪観光局が日本への観光客が急増している東南アジア諸国を中心に、食も含めた大阪の観光魅力を強力にPRしているところでございます。

2015年のミラノ万博への地方自治体の参加は、日本館のイベント広場で数日間

プロモーションを行うという形の催しに対するものとなっております。イベントにかかる費用やイタリアからの観光集客の効果などを考慮いたしまして、府が費用負担しての参加は見送ることといたしておりますが、ミラノ万博に向けた在阪企業や民間団体の動きがあれば、府としても可能な限り支援してまいりたいと存じます。



3 御堂筋側道の歩行者空間化について

〈坂上議員〉

最後に、御堂筋の歩行者空間化についてですが、「グランドデザイン・大阪」では、「御堂筋・周辺エリア」などの都心部において、将来的に自動車を排除し、みどりあふれる人中心の都市空間を創造し、住み、働き、楽しめる都心を実現することが示されています。

昨年12月には、「国家戦略特別区域法」が成立し、産業の国際競争力強化と国際的な経済活動拠点の形成に向け、「居住環境を含め世界と戦える国際都市の形成」、「国際的イノベーション拠点整備」といった観点から、都心部を中心に、特例的な措置を組み合わせ、世界で一番ビジネスがしやすい環境を創出することが示されています。

大阪都市中心部においても、この国家戦略特区の活用により、これまでの仕組みを大きく転換し、大胆な規制緩和により、民間が自由にチャレンジできる環境を整えていくことによって、世界から資産、技術、情報、人材を呼び込める魅力ある都心地域の再生を進めていくことが必要と考えます。

すでに、大阪都心のシンボルである御堂筋においては、本年度、新たな地区計画の決定やデザインガイドラインの策定によって、ビルの高さ規制の緩和や居住機能の導

入、1階部分への店舗配置など、御堂筋への投資環境の整備と沿道の賑わいづくりに向けた取組が進められています。

とりわけ、御堂筋に人が歩き、楽しめる空間の創出に向け、昨年の秋には、御堂筋の東西に5mずつある側道の自動車通行を規制し、安全・快適で魅力ある歩行者空間を創出したときの交通への影響やにぎわい形成への活用方策を検証するための社会実験が実施されました。

私も社会実験の期間中に現場を訪れましたが、一週間の短期間ではありますが、御堂筋の新橋交差点から難波西口交差点間の東西の側道を閉鎖し

側道を活用して空間再編を行った場合の本線での交通影響を調査するとともに、難波交差点以南の東側側道に自転車道を設置し、歩行者と自転車の通行を分離する実験が行われていました。

さらに、道頓堀橋南詰交差点付近では、側道の一部を利用したミナミの食の魅力を発信するブースでの販売や、御堂筋では初めての試みとなる側道内でのストリートパーフォーマンスの実施等、御堂筋の道路空間を活用した、賑わいの創出に向けて、地域の方々が積極的に参加されていました。

これまで車中心で活用されてきた御堂筋を、一度に歩行者中心に再編することは難しいが、御堂筋の自動車交通量は、ピーク時の約6万5千台から平成22年度調査では約3万5千台まで減ってきております、今年度の社会実験の結果等も踏まえ、大胆な規制緩和によって、御堂筋の歩行者空間化を進めていくことが必要と考えますが、今後どのように取組むのか、住宅まちづくり部長のご所見を伺います。

〈 住宅まちづくり部長 答弁 〉

御堂筋につきましては、先ずは、側道を歩行者空間化することとしておりますが、将来的にはみどりあふれる人中心の都市空間を創り出す全面みどり化ということを目指しております。その段階的な取組みといたしまして、側道の自動車交通を排除する社会実験を行いました。

交通影響等については現在分析・評価中ではございますが、多くの方に楽しんで頂き、にぎわい空間創出の可能性があると示せたと考えてございます。将来の全面みどり化に向けては、現在、交通やまちづくりの専門家の意見もお伺いしながら、交通処理方策や人中心の賑わい空間をいかに創り出すか、道路空間の使い方や、みどり化の進め方につきまして検討を行っているところでございます。

御堂筋を現在の「車を重視した道路空間」から、安全で楽しんで歩ける「人を中心とした道路空間」へ再編いたしまして、にぎわいのある空間としていくための仕組みづくりなどにつきまして、引き続き大阪市と連携して取組んでまいります。